

〈第36回環境学習セミナー報告〉

『明日の小菅村を探る』～持続可能な地域社会の再検討～

黒澤友彦・中込貴芳・木俣美樹男（自然文化誌研究会）

“Searching for Tomorrow of Kosuge Village” — A Review on Sustainable Regional Community

Tomohiko KUROSAWA, Kiyoshi NAKAGOMI and Mikio KIMATA
Institute of Natural and Cultural History

1. はじめに

過疎高齢化や限界集落などの悲観的な用語が世間を飛び交うなかで、日本の山村は多くの課題を抱えながらも、素のままの美しい暮らしを、今に継承してきた。現在、人口700人余の小菅村でも、「源流の郷」や「エコミュージアム日本村」など、以前から多くの村づくりの取り組みがなされている。源流の郷（小菅村発）、エコミュージアム（フランス発）、トランジションタウン（イギリス発）、美しい村連合（フランス発）の4つの代表的事例から、その活動経験を学び、地方消滅論を再検討し、これを克服する方策を探ることにした。

2. 地域社会づくりの経験

1) 趣旨説明と挨拶

— 青柳諭（ミュージゼス研究会代表） —

第36回環境学習セミナー「明日の小菅村を探る」～持続可能な地域社会の再検討～にご参加いただき感謝申し上げます。ミュージゼス研究会は、日本の山村に伝承されてきた知識を調査し、伝統的知識・技能を学び、環境保全・創造する活動を通じて、持続可能な地域社会をめざす「エコミュージアム日本村」づくりを平成18年から行っている。成果を活かして8集落の散策マップを制作し、道の駅などにおいて来訪者に提供している。

今回のセミナーは、「源流」をキーワードにして地域づくり、村づくりを行っている小菅村において、源流の郷、トランジションタウン、美しい村連合の3代表から報告と、全国的に話題になっている地域消滅論についての講演をい

ただき、全国の山村が直面している課題等を検討する機会となればと思っている。

2) 源流の郷小菅村

— 佐藤英敏（小菅村教育長） —

小菅村は、昭和62年の「多摩源流まつり」の開催を機に『源流の郷』を意識したむらづくりを展開してきた。それは、小菅村が首都圏を流れる多摩川の源流域に位置するという現実からであった。

多摩川流域には、400万人を超える住民が暮らし、その流域と交流と連携を深めようというものであった。山々を源とする清流は、山郷を潤し、そのあちこちに生業が広がり、豊かな源流文化を育ててきた。源流には、先人から受け継がれた「技」や「知恵」が存在している。こうした人間社会の源こそ、源流にはかならない。21世紀は、源流が輝き源流が大切にされる環境の時代だと思う。小菅村は、源流の価値や魅力を前面に出し、源流にこだわり源流を活かした村づくりを展開している。

環境の時代、持続可能な社会へのヒントは源流にある。便利さに依存しすぎてはいけない。源流という用語は1986年から使い始め、源流そば、源流の郷協議会、源流大学などの活動を進めてきた。また、東京都狛江市いかだレースなど、多摩川流域住民と交流を進めてきた。

3) 全国のトランジションタウン活動と藤野の例

— 小山宮佳江（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表／トランジション藤野メンバー） —
トランジション活動は、持続可能な暮らしを

地域の仲間たちとともに創り出す活動。地域の資源を見直し、身の丈にあった「できること、やりたいこと」をしながら、人と人が楽しくつながることで息の長い活動を行い、シフトした地域を増やすことで、持続可能な社会の実現を目指している。

丁寧な暮らしと、環境とひとりひとりが尊重される社会の創造。世界をはじめ日本各地にこのトランジションタウンという活動のしくみが広がっている。相模原市旧藤野町では、知恵、心、実践、また自発性、内発性を大事に、無理をしないで人々をつなぐボランティアな活動をしている。リーダーを固定していない。やりたい気持ちを持ち大切に、自発性だけでもなんとか活動を続けることができている。

4) 「日本で最も美しい村」連合が目指す地域社会の未来

――杉一浩（NPO法人「日本で最も美しい村」連合 常務理事）――

NPO法人「日本で最も美しい村」連合は本年設立10周年を迎え、6月には北海道美瑛町での総会・戦略会議の開催に合わせて、「世界で最も美しい村」連合会の総会を開いた。連合組織の原点は、入会合否の資格審査があることと相互に学び合う場を提供することで、自立の村づくりを目標に据えて、成熟社会の持続的・地域モデル構築を目指している。加盟町村の人口減を食い止めて持続的な美しい村を実現、地域資源を未来に継承するためには、経済的な自立と住民自治が2本柱。54の加盟町村には多様な分野ですぐれた先進事例を持った町村も多く、さらには仏、伊、独への学びの旅から自立の村作りの多くのヒントを得て来た。連合が継続的な学習活動で展開している自立の村作りへの先進事例を紹介する。

人々の営みがあって、多様性のある美しい村が維持される。自分たちのことは自分たちで決める、自立した村づくり。資格審査は日本・世界の先進事例を相互に学び合う場でもある。自給・循環型経済、地域経済の自立と住民自治で、地域にお金が残るようにする。リピーターは

人々の交流と多彩な料理の味が魅力で増える。若者の雇用ビジョンが必要で、特色を出し、真の豊かさを探ることだ。

3. 地方消滅から地方創生へ

――山下祐介（首都大学准教授）――

基調講演の詳細は別（48ページ～）に掲載した。人口減少は「選択と集中」という人々の心の問題である。都市化したところでも出生、子育てできるようにすることが先にある課題だ。今は東北地方でも出生率が急減している。都市の人々は農山村への支援を自覚し、住民と行政は相互依存的に協働しながら、自立をめざすべきだ。

4. 地域（場）の伝統知に学び、暮らす～ムラを開いて広くつながる社会へ～

1) 総合討論

① 序列意識／価値から外れるという考え方

A：やりたい人がやりたいことをするので、固定的にリーダーはいない。ボトムアップ的な仕組みでチーム作りし、序列はない。トランジションで世界とつながるが、具体的な活動で地域をつなげる。

B：序列社会で生きてきて、疑問ももったので、美しい村の活動に加わり、別の人生の満足感を求めた。「村のエスプリ」、地域を守るために、住民によるコンビニ、地元で買い物をし、よそでお金を使わないようにする。

C：住民と行政のコミュニケーションが少ない。助成金は必要だが、依存してはいけない。

② 小菅村と都市との交流の現状

A：多摩源流まつりを行う中で、ビジョンを策定した。源流親子事業（教育再生）で、8世帯20名が移入してきた。

③ 学校がなくなると、若い人が来なくなる

A：村を変えるのはIターン女性だ。地域おこし協力隊員は3年後にどうするのか。職場を作る必要がある。コンサルタントへの丸投げはよくない。住民が参画して構想を練るべきだが、役場職員が住民に協力を求めない。

B：小菅村では都市との交流はできている。未

表 事例の比較

2015-11-14木侯

	エコミュージアム	最も美しい村	源流の郷	トランジション・タウン
発祥	いつ どこで 1971 フランス、ウェッサン島エコミュゼ	1982 フランス	2005 日本、小菅村	2005 イギリス、トットネス
目的・定義	ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式をあらゆる自然・文化財産を総体にして、恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関である。	田舎の小さなコミュニティ(基礎自治体)の存続と広域連携。特性ある歴史的財産など(社会的共通資本)をもとに観光内容の質を高め、価値つけたプログラムと観光情報を提案する。協会への加盟は規程の選定基準に即す。	日本の源流域は、国土保全や環境保全の最前線に位置しており、河川の流域だけでなく、我が国にとっても非常に重要な地域。会員一同その責任を自覚し、源流域の環境などを保全に務めている。源流域の恵を共有する流域の皆さんと一緒に活動していくことが必要。源流域の重要性を多くの方々理解していただき、協力が広がるよう「源流白書」を作成し、源流域が存続していけるよう源流基本法の制定などを提案し、その実現に取り組んでいる。	復元力resilienceを再構築し、CO2排出を減らす活動を創り出しながら、移行モデルをめくって、自己形成するような共同体を発達させ、励まし、つなげ、支援し、養成する慈善団体。…市民が自らの想像力を発揮しながら、地域の底力を発揮し、これを高めるための実践的な活動。暮らし方を少し変えるだけで、楽しく豊かに、自由になれる。コミュニティの中で、変化を作り出し、実践、共有する。
活動内容	動産・不動産遺産の目録作成、資料保存・展示、催しの企画、コレクションの充実、調査研究・普及、報告、など	最も美しい村の呼称とロゴ使用の審査・管理。観光情報の提供。景観保存・都市計画・政策、文化・自然遺産の保全。	源流域の持つ豊かな自然環境の保全に務めるとともに、源流資源の役割と機能を広く国民に訴え、国民的な理解を広げながら、流域のシンボルとして源流域の安定した生活が持続できるように全国の源流の郷が心をつなげて「参加・連携・協働の源流の郷づくり運動」を推進すること。	健康的な人間文化を創造する。イベント、会議、研修、出版、などを行う。いろいろな手法で、世界をつなぐ。…エネルギーや食料の自給、心身の健康、環境変化への対応、社会的課題の共有、解決努力。伝統技術の継承、学びの場づくり。
組織基盤	地方自治体、公的機関、合同組合、アソシエーション、財団、市民 国際的に広がる	州・県、町村の行政 国際的に広がる	町村の行政 日本国内に限定	市民、市町村の行政 国際的に広がる
規模	約90(フランス60、ベルギー3、カナダ1ほか、日本含まず) 1996	フランス157(2014)、日本54(2015)、ほかベルギー24、カナダ36、イタリア208(2011)。	22 (2015)	イギリス、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イタリア、カナダ、フィンランド、ドイツ、デンマーク、ベルギー、オランダ、フランス、スペイン、アイルランド、ラトビア、チリ、ハンガリー、ギリシャ、トルウェー、南アフリカ、イスラエルなど、公式登録は現在479、うち、日本 3(国内47、2015)
ネットワーク	MINOM 新博物館学のための国際運動 1983	世界で最も美しい村連合会、「日本で最も美しい村」連合(2005)	全国源流の郷協議会、全国源流ネットワーク	トランジション・ネットワーク、トランジション・ジャパン
関連研究組織	日本エコミュージアム研究会 1995			
小菅村での活動	エコミュージアム日本村 2000～		提唱	トランジション小菅 2015～

参考文献: 新井重三、1995、実践エコミュージアム入門、牧野出版。大原一興、1999、エコミュージアムへの旅、鹿島出版会。
R. Hopkins. 2008. The Transition Handbook "From oil dependency to local resilience. トランジション・ハンドブック—地域レジリエンスで脱石油社会へ—、第三書館。
Guide officiel de l'association. 2012. Les plus beaux villages de France, Selection Reader's Digest.

来思考、幸せと思えること、教育が大事だ。地域おこし協力隊員が自立できるか。

④村の一員として、排除の論理が働かないように、どの段階で受け入れを認知するのか。Iターンだけではなく、Uターンの在り方も考えるべきだ。

⑤共通する考え方「依存し過ぎない、自立する」、「自発性、内発性」: ボランタリーな活動が個性、多様性のある地域の在り方を形成する。自立というのは適度な妥協はするというので、反抗的ということではない。「序列」: たとえば、大学も序列社会である。その中において、個人として信条に従い、意見を述べ、必要があれば抵抗もし、行動する。心を閉じるのではなく、半開きにしておき、柔軟に対応する。学びの場を維持し、生涯学習の機会を拡大する。「学びの観光」、エコスタディ・ツーリズム。

2) まとめ

都市民は、健康で幸せであるために、自然の一員としてのヒトの暮らし方、素のままの美しい暮らしを農山村民から学ぶのがよい。地域(場)で長老たちから暮らしの技能を体験的に学び、手間暇かけて、自給の不便から学び、暮らしのあり方をゆっくりと自分で納得しながら、より良く変える。このためには、農山村民はムラ社会(実は都市も含めて、日本の社会組織の一般性質)をより開放的にせねばならない。こうして、農山村民と都市民の確かな連携、協働ができれば、永続する暮らしのあり方を探りながら新たな文明へと向かう可能性が開ける。この可能性を具体化する実践事例が、世界各地で行われている地域(場)で学ぶ活動において展開されている。

紹介された4事例を比較して、表1に特色を示した。エコミュージアムは、フランス発祥の

活動概念（1973）で、新博物館学のための国際運動（1983）というネットワークにより、主にフランス語圏に普及し、日本エコミュージアム研究会（1995）もある。小菅村でも同研究会大会を開催したことがある。

同様に、フランスで最も美しい村（1982）の活動が始まり、協会加盟には基準が厳しい。世界で最も美しい村連合会というネットワークがあるが、大方がフランス語圏に普及、日本は例外的で、日本で最も美しい村連合（2005）がある。源流の郷協議会（2005）は、小菅村役場から発祥した活動であり、日本国内に限定されている。

トランジション・タウン（2005）は、イギリスのトットネスで発祥した。市民活動であるので、前三者のように研究機関や行政機関の発想によらないので、日本を含めて急速に世界中に広まっている。エコミュージアム日本村はトランジション小菅を兼ねて、新たな市民活動概念を学び、吸収することにした。

自然文化誌研究会が提唱している「やあ山村、雑穀街道」は、湘南新宿ラインおよび中央ライン沿いに東西方向に都市をつないで普及しているトランジション・タウンを、南北方向に両ラインを横切って、すなわち山村と都市をつなごうと志向するものである。

事後の反省会の議論により、次回開催の「第37回環境学習セミナー」では、再度、首都大学東京の山下佑介さんに、さらにじっくりとお話ししていただくことにした。